

土のある暮らしと文化

土と暮らしの民俗学

—生活に豊かさをもたらす土の文化

新谷 尚紀 *Written by Takanori Shintani* 民俗学者

田舎の香水

2010年10月、ポーランドのポズナン市にある国立アダム・ミツケヴィチ大学の民族学学科が中心となって国立科学アカデミーとの共催で欧州国際民族学研究会が開催されました。それに日本の民俗学の立場から高度経済成長と生活変化についての研究発表をしてほしいと招かれたとき、見学地として何カリクエストはないかと訊かれた私たちは、カトリック信仰のあついポーランドの人たちが11月1日の万聖節と2日の万霊節を前にして、さかんに墓掃除をしているふつうの農村の墓地の見学をしたいと言いました。そこで案内された郊外の農村の墓地に着いて自動車から降りたときに驚いたのは、あのものすごい臭いでした。それは、昭和23（1948）年に広島県西北部の中山間地農村の農家に生まれた私にとって、子供のころの「田舎の香水」の記憶をよみがえらせてくれました。まさしく牛馬の糞尿から作る堆肥の、あれの何倍かというほどの強烈な臭いでした。見学した墓地の墓掃除の様子や墓参りについて得られた情報はそれなりに興味深いものでしたが、それ以上に、あらためて臭いと悪臭の生活史という観点が浮かび上がってきました。

日本でも、第一に化学肥料の普及が農村からあの臭いを、第二に冷凍施設の充実が漁村からあの臭いを、第三に水洗トイレの普及が便所からあの臭いを、第四に洗濯機や洗剤やナプキンの普及が汗や垢や経血などのあの身体の臭いを消していった生活の歴史がありました。いずれも日本では昭和30年代から40年代の約20年間の高度経済成長期を境に起こった変化でした。それは清潔へ衛生へという大きな変化でした。西暦で言えば1955年から75年の約20年ですが、終戦が昭和20年なのでこの時期の区分は昭和の年号による方が当時の実感にあいます。経済史学では正確を期して1973（昭和48）年の第一次オイルショックまでを高度経済

成長期ととらえますが、民俗学では多くの人たちの生活の変遷史に注目するので、その後の長い変化の過程、そしてその地域差などにも注目します。

土壌に育まれた生活



経済企画庁の統計によれば、高度経済成長期やバブル崩壊などを経た後の1995年には5・3%、約345万人しかいなくなつた農林水産業の従事者が、高度経済成長期以前の1950年には45・1%、約1610万人もいたことが知られています(※1)。高度経済成長期以前には日本人の多くが土壌と農業とを基盤として長いあいだ生活してきていたのです。その農業の基本は食料の生産にあります。私たちの食料を供給してくれるのが農業であり、その基盤が土壌です。ではその土壌とは何か。土壌学の専門家は土壌の役割について次のように4つに整理しています(※2)。

- (1) 生産者として、陸上植物の生育を支え、それを起点とする食物連鎖によつてすべての陸上生物を養う。
- (2) 分解者として、陸上生物の遺体や排泄物などの有機的物質を分解し、元素の生物地球化学的な循環をつかさどる。
- (3) 地球上の水循環の経路となつて、水圏の生物や物質の循環を調節する。
- (4) 大気圏との間でガス交換をして、大気組成の恒常性の維持に寄与している。

つまり、人間はもちろんのこと地球上のあらゆる生物を生かしているのがまさに土壌なのだ、ということなのです。そして、その貴重な土壌の生成とはおよそ2600年もかかってやっと15センチの表土ができる程度であり(※3)、人間に大きな恵みをもたらす肥沃な農業土壌というのは、実は地球規模で非常に長い年月がかかってやっと生成されてきている貴重なものだ、と説かれています。その貴重な

な土壌がいま、経済効率追求を第一とする人間の誤った管理や不適切な使用によつて、その再生可能な構造が危険にさらされているということが問題になってきているのです。

その大きな画期が昭和30年代から40年代の高度経済成長期でした。しかしいま、2011年3月11日以降の福島第一原発の事故故にともなう放射能汚染の大問題が、地球規模の大気汚染、海洋汚染、土壌汚染の問題となつて現代と未来の地球人を襲つてきています。

柳田國男を中心として折口信夫や渋沢敬三の協力のもとで創生された日本の民俗学の視点は、欧米発信の民族学や社会学や戦後の文化人類学の視点とは異なる独自性をもっています。それは民俗を対象とする変遷論と伝承論とを併含する立体的な歴史学としての特徴をもつという点です(※4)。そして、その民俗学は、大きな変化の時代に対応していくには「年久しい慣習を無視したのでは、よかれ悪しかれ多数の同胞を安んじて追隨せしめることができない」(※5)という視点に立ちます。

土壌維持と施肥



そこで、私が子供のころに広島県西北部の中山間地農村で見聞していた農業の様子と共通するような、高度経済成長期以前の農業の実態の一部が分かる資料があるので、紹介してみます。それは渋沢敬三が支援して出版した数多くの貴重な民俗資料の一つで、アチック・ミューゼウム彙報の第48集として刊行された田中梅治(1868~1940)の『粒粒辛苦・流汗一滴』(※6)という本です。副題に「高根県邑智郡田所村農作覚書」とあるように、それは中国山地の農村の体験記録です。そこに書かれているのは、土壌の地力維持のための自給肥料の大切さです。田植えや稲刈りや草取りという農作業の他に、もつとも多くの時間と労力が割かれていたのが、さまざまな自給肥料の製作と施肥の作業でした。

春の3月末には苗代作りが始まります。まず最初の仕事は苗代田への大量の苗代肥えの運び込みです。苗代肥えというのは、焼土、採り草、厩肥、麻の葉、人糞尿、それに乾鰻などです。明治30年代にはその中国山地の農村にも金肥(購入肥料)の乾鰻が入ってきていました。まず焼土というのは、クヨシとも言い、前年から山に行つて松の木の間伐などを使った用材にならないようなものや、厚く茂り過ぎた松林の間伐などをして、それらの枝葉を採つてかえり、畑の土や路傍の土などを持ってきてその上に載せ、またさらに杉の葉などを載せるなどしてじっくりと焼いて作るものです。これは苗代作りにはなくてはならないものでした。採り草というのは田畑のあぜの草刈りや山の笹刈りのことで、どこの集落でも奥山に広大な山笹の刈り取り場がありました。草刈り場とも言いましたがその多くは入会地として共同利用のかたちをとられていました。ふもとの村から奥山の草刈り場までの1里以上もの往復はたいへんでしたが、山笹は農家にとって非常に重要なものでした。『粒々辛苦』にはその山笹刈りの様子が次のように書かれています。

「春になれば暇さえあれば笹刈りをなして、なるべく多く田へ入れるようにする。隣部落の馬野原の大きな山林に笹が一面生ずるので、往古から刈り来りになっていて、12〜13歳から24〜25歳ころまでの男女青年が、朝と夕とに二度一里以上、しかも中央に急坂あるを、上下してさかんに行き、隣村の出羽村からも同所へ行くので、真つ盛りの時は百人以上も行く。夕方の帰りにには峠の上まで上り来て一斉に休み、角力を取るなど大騒ぎをして帰る。この事は明治15〜16年ころが最もさかんであった。それが学校へ就学奨励が嚴重になって14〜15歳までの男女は行かぬようになり、また漸次かかる労力のかかることが廃れ行くにつれて、今は(昭和10年代Ⅱ1930〜40年ころ)まったく行くものがなくなり、わずかに部落内の自分の山にある笹を刈り入れるくらいのことになった。」(原文はカタカナ混じり文)

その山笹は牛が好んで食べる飼料でしたが、同時に厩舎の床に敷い

て牛馬の糞尿と混ぜて厩肥ともなりました。厩舎の床には藁も敷きました。そうして出来る厩肥を厩舎から運び出して積み、それに採り草や焼土を交互に積み重ねて発酵させて作るのが堆肥でした。

苗代作りが終われば、次は田植えの準備です。田の荒搔きをして、山での笹刈りなどもしながら5月20日ころから26〜27日までの間に、各家では駄屋肥負いをします。この駄屋肥負いというのは駄屋肥負いのオイコ(背負い子)に厩肥を入れて背負い、それを何度も何度も繰り返し田んぼに運ぶのです。これはなかなか人手と手間とがかかるもので、テマガエ(手間替え)と言って近所の人たちもたがいに協力し合いながら5〜6人から12〜13人で運んだものでした。

この『粒々辛苦』では農家にとって自給肥料がいかに大切にされていたか、次のようにも書かれています。

「昔はなるべく自給肥料を多く入れるという主義にて、笹草をもなるべく多く刈りて入れる。これは大きな肥桶を田の端に持ち行きて据え置き、春もつとも早く芽の出たるたつという木の芽がよい肥料になるとて、これを採りてこの桶に入れ、水を加えて腐敗せしめて、田面に施す。現代の人たちは金肥を使って、こんな労力のかかる話をすれば、馬鹿げたことに思うのであるが、昔はかくのごとくして自給肥料に力を入れたものである。」(原文はカタカナ混じり文)

骨太の人生を送った篤農家として、古きよき時代を懐かしみつつ軟弱化していく新たな安直な風潮を批判しています。そんな昔気質の実篤な田中翁の人間像は、いまま現地の人たちのあいだで語り伝えられています。

田植えのあとも6月から9月初旬までは山での夏草刈りが続けられ、その間、7月には暑い中での田の草取りの重労働が続きます。とにかく、昔の農家では暇さえあれば、肥料や飼料としての草刈りと厩肥や堆肥や焼土などを作る仕事が続けられていたことが分かります。いかに肥料が大切であったか、いかに土壌を大事にしていたか、ということも分かります。

農業の機械化と化学化



私が子供のころに祖父母や両親たちが営んでいた農業というのは、この田中梅治翁よりも一世代ほど次の時代です。昭和30年代です。もう高度経済成長が始まっています。高度経済成長による農業の変化といえば、その特徴は機械化と化学化です。私の郷里の広島県旧千代田町の統計からみてみましょう。表1が農業機械の導入状況です。表2と表3とが昭和37（1962）年5月31日から6月3日にかけて行なわれたヘリコプターによる農薬のマラソン製剤の一斉散布のときの数値表です。それまで春から夏への夜を楽しませてくれていた蛍が、この農薬散布を境にまったく見られなくなったことは今でも鮮明に覚えています。その後は、ヘリコプターによる農薬散布ではなく各農家による農薬散布がはじまり、健康への被害が懸念されながらも、まもなくそれが定着していきました。



昭和40年代の農作業 苗取り（広島県旧千代田町）

また、除草剤の導入は、それまでの炎天下での手押し式の除草機での草取りという重労働から人びとを解放していきましたが、土壌の悪化への懸念が語られながらも、やはりそれもきびしい作業負担の軽減には換えられず、まもなく定着していききました。

表4は、昭和53（1978）年頃の農業の収支を示したものです。米が

【表3】 航空防除 ヘリポート別散布計画

期日	ヘリポート	受持機体	散布計画面積	々農薬量	ヘリコプター	
					回数	燃料
5 31	⑭河内	4	(ha) 76.5	(袋) 96	(回) 10	(缶) 9
	①丸押	5	13.7	18	13	2
	②広能	5	89.7	113	19	10
	小計		179.9	227	32	21
6 1	⑮川東	4	122.0	153	16	14
	③千坊	5	119.3	150	25	14
	小計		241.3	303	41	28
6 2	④有田	1	170.0	213	22	19
	⑤河本	2	110.0	138	23	13
	⑥今田	3	146.0	183	31	16
	⑯保余原	4	115.0	144	15	13
	⑰額田部	5	82.8	104	18	10
小計		623.8	782	109	71	
6 3	⑦春木	1	150.0	188	19	17
	⑧寺原	2	140.0	175	30	16
	⑨舞網	3	40.0	50	9	5
	⑩竜山	3	70.0	88	15	8
	⑫上川戸	4	118.0	148	15	13
	⑬下川戸	4	60.0	75	8	7
	⑱本郷	5	131.2	164	28	15
小計		709.2	888	124	81	
			1754.2	2,200	306	201

【表1】 農機具の普及状況

	耕耘機・トラクター	動力防除機	田植機	バインダー	バルククーラー	コンバイン	乾燥機
昭和							
30	23						
35	176						
40	310						
45	1,706		8	366		3	952
50	1,921		711	1,333		66	1,237
55	2,211	1,484	1,034	1,106	15		1,263
	86	65	160	90	2		19
60	2,357	1,555	1,236	868		890	1,299
	183	20	251	84			

出所) 千代田町「統計台帳」
 (注) 昭和55年・60年の上段は個人所有、下段は共用をしめす

【表2】 航空防除 農協別散布計画

農協別	散布料		数量		小計(円)	雑費(円)	合計(円)
	面積(ha)	料金(円)	数量(kg)	金額(円)			
川戸	178.0	240,300	223	238,833	479,133	53,200	532,333
八重	826.0	1,115,100	1,035	1,108,485	2,223,585	164,400	2,387,985
壬生	313.5	423,225	393	420,903	844,128	77,000	921,128
本地	222.7	300,645	281	300,951	601,596	71,600	673,196
南方	214.0	288,900	268	287,028	575,928	52,600	628,528
本部						65,000	65,000
計	1,754.2	2,368,170	2,200	2,356,200	4,724,370	483,800	5,208,170

(注) 散布量は10a当り 135円
 農薬代は1kg当り 53.55円(マラソン粉剤12% 10a当り2.5kg)(1袋20kg入1,071円)
 雑費は別表による

【表4】主要な農業収入と農業支出 (単位:万円)

主要な農業収入		主要な農業支出	
米	15億6,000	肥料	1億4,000
野菜	1億7,000	農薬	8,000
養鶏	3億5,000	農機具	8億
酪農	1億2,000	生産資材	1億5,000
タバコ	5,000	飼料	3億4,000
合計	22億5,000	合計	15億1,000

出所)「千代田町野菜生産者大会」昭和53年
(注) 原資料は昭和52年農業センサス

主な農業収入源で約15億6000万円であったのに対して、支出も約15億1000万円にのぼり、支出の半額以上の8億円が農機具関係、約2億2000万円が化学肥料と農薬であったことが分かります。その化学肥料とは、農協を通して提供される窒素・リン酸・カリのいわゆる三大要素を中心とするものでした。「機械化貧乏」などと言われたのもこのころです。

製造業の驚異的な伸び



高度経済成長は農業労働を軽減させていった一方で、農業収入をも減少させていきました。数字的には収入は増えましたが、物価の変動もあり、何よりも産業別生産所得をみればその比重がまったく低下していることが分かります。表5がその変化を示すものです。この町域の生産総額が昭和37(1962)年には10億6500万円であったのが、昭和57(1982)年には181億3900万円と驚異的な増加をみせており、これがまさに高度経済成長かと思わせます。生産所得の伸びは、第1次オイルショックの昭和48(1973)年で止まっています。その後も伸び続けています。その内訳を金額と構成比とからみてみますと、昭和37(1962)年に6億1200万円、57(1982)年に15億7800万円と大きく増加していますが、その構成比は大幅に減少して、わずか8.7%に過ぎなくなっています。それに対して、第2次産業は8400万円から79億8600万円へと約100倍近い驚異的な増加をみせており、構成比も7.9%から

44.0%へと激増しています。第3次産業も3億6800万円の34.6%から85億7500万円の47.3%へと増加しています。こうして第2次産業の伸びがとくに大きかったことが分かります。つまり、この旧千代田町という中山間地農村は、景観の上ではまちが、なく農村のままなのですが、産業構造の上からみれば昭和50年代後半にはもうすでに都市型社会へと変貌していたのです。

【表5】産業別生産所得

	第1次産業	第2次産業	第3次産業	合計
昭和37	612百万	84百万	368百万	1,065百万
	57.5%	7.9%	34.6%	100%
42	1,162	316	912	2,390
	48.6	13.2	38.2	100
47	1,127	2,012	2,491	5,629
	20.2	35.7	44.3	100
52	1,759	4,304	5,402	11,463
	15.3	37.5	47.1	100
57	1,578	7,986	8,575	18,139
	8.7	44.0	47.3	100

出所) 千代田町「統計台帳」
(注) 各年上段は実数、下段は構成比。実数については小数第1位を四捨五入。そのため、合計があわない場合がある。

有機農業という伝統力



最近、化学肥料や農薬の連続的使用による土壌養分の偏りや農地の地力減退、土壌汚染や水質汚濁や人間の健康被害などが問題視されるようになってきています。高収入を可能とする畑作経営などでは、経済的効率性のみを追求する農業の限界が指摘されてきています。土壌汚染に対する土壌消毒というような対応では、やがてまた新たな複雑な障害が起こる可能性もあります。そこで、高度経済成長期以前のように、作物の残渣を土にかえす、山の落葉を掻き集め下草を刈って踏み込む、馬糞や牛糞や人糞尿を利用する、などの有機農業が見直されるようになってきています。有機農業という言葉の早い例は、昭和46(1971)年の「日本有機農業研究会」だとされていますが、現在では広く各地で有機農業への取り組みが始まっています。



土を大切に作る人達

夏の炎天下の草取りはたいへんな重労働です。しかし、このハクサ(葉草)はこの時期に抜いておかないと、あとで根を張ってきて手に負えなくなります。除草剤を使えばすぐに枯れますが、それだと土が悪くなってしまいます。人間の口に入れるものにはやたらと薬は使いたくないとのこと。ここには自分たちが食べる蕎麦を植えるつもりだそうです。炎天下では日差しも暑いがドイキ(土息)もたいへん熱いのです。それでもやらなければならない草取りとは、土を大切に思う心に支えられている作業なのです(1997年、栃木県鹿沼市にて)。

私も郷里の広島県旧千代田町、現在は合併して北広島町となつていますが、その地域での農業の法人化経営の形成過程やそれぞれの実態について少し調査したことがあります(※7)。そこでもやはり化学肥料の連続的使用の弊害として、窒素過多の傾向を示す水田が少なくありませんでした。そこで、農業法人の多くは昔のような有機肥料に戻そうとして、乳牛や肉牛を飼育する酪農家や畜産農家と提携協同して、し尿処理を済ませた厩肥を購入して利用する方式を採用してきています。もちろん昔の農業に戻すといつてもそれは完全なかつては無理です。厩舎に敷くのは昔のような手間ひまのかかる山笹ではなく、手に入りやすいスクモ(糊殻)や藁やオガクズなどです。何よりも化学肥料の普及や燃料革命により、山笹刈りや材木伐採などが行なわれなくなり、山はかつてのような人間と対話しているような山では

なく、もう木々が繁るにまかせて荒れてしまっています。それでも土を相手とする農業にとって、伝統的な自然の養分循環を利用してきた土壌管理こそが実は最も力のある方法であるということとは、誰よりも農家の人たちがよく知っており、今からでも遅くはないとして、有機肥料の利用が各地で進められています。

民俗伝承の三波展開



民俗の伝承とその力に関してこれまで私が提唱しているのは、近現代の日本社会における民俗伝承の3つの波、という仮説です(※8)。それは、α波(伝統波)、β波(創生波)、γ波(大衆波)という3つです。α波とは近世以来、明治大正期の近代化が進む日本社会においても伝承されてきていた民俗の波です。β波とは、明治の文明開化からその後の大正昭和戦前期へかけての近代化の中で、欧米文化の導入模倣として新しく華族層や新興のブルジョア層をその担い手として創造された都市文化であり上流階級の生活文化の波です。そのβ波の生活文化は、衣食住や冠婚葬祭や芸能芸術をはじめ、旧来のα波の生活文化とは大きく異なる新しい先進的な生活文化でした。α波とβ波の決定的なちがいは、α波が人力や畜力、風力や水力などの利用による伝統的な自然利用の自給的な生産経済を基盤とする生活文化であるのに対して、β波が近代産業革命を決定的な画期として生れた機械力による商品生産とその大規模流通を実現した産業資本的な生産経済をその基盤とする生活文化である、という点です。それに対して、γ波というのは、戦後の昭和30年代、40年代の高度経済成長期を画期として展開した新しい大衆生活文化の潮流のことです。それは前述の明治大正期から昭和戦前期までの近代都市ブルジョワ社会が創造してきたβ波が基本となつて、そこから模倣的に創造され広く一般大衆化した新しい生活文化の波です。衣食住から冠婚葬祭をはじめ、経済的な伝承や社会的な伝承も含めて、すべての民俗伝承がγ波の時代へと展開したそ

の画期が、昭和30年代から40年代の高度経済成長期であったわけだ。

具体例をあげてみるならば、次のような変化だ。人間の誕生と死亡をめぐる民俗が多くの禁忌に包まれながら妊産婦の母親やトリアゲバアサンの技能によって担われていた状態から、近代衛生観念にもとづいて産婦人科病院の医師や看護婦の技能による医療の対象となったこと、つまり出産の医療化という変化だ。同様に、家族による死の看取りから遺体看護また近隣の相互扶助による葬儀と埋葬や野焼きの火葬という方式から、病院での死、そして葬祭業者による葬儀、公営火葬場での重油炉やガス炉での火葬という変化であり、いわゆる死と葬儀の商品化だ。農業や漁業の機械化なども同様の変化であり、高度経済成長期を経る中で民俗伝承のγ波の時代が到来したのだ。そして、α波とβ波の並存併走の時代は終わり、β波がγ波へと吸収され、α波はその伝承生命を終えようとしているのだ。

しかし、はたして伝統波たるα波は消滅してしまうのでしょうか。いや、そんなことはありません。最近では結婚も葬儀も身近な者たちだけの食事会を中心とする結婚披露や静かに故人をしのぶ家族葬へと回帰する動きがあります。農業でも自然と交流して楽しみながら経営をも成り立たせていけるような農業へと回帰する動きがあります。土壌の成り立ちを経験の積み重ねの中に知り、深い感謝の思いとともにその恩恵を維持する努力を重ねてきた先祖たちの知識と技能のその長い伝統の中に支えられてきた智慧に、私たちはいまこそ学ぶ必要があります。その智慧は年季が入っているだけに貴重であり、時代ごとにそれぞれ形と道具立てとを変えながらも、世代を継いで伝えられていく力を宿しています。

かつてモーターゼーションの到来とともに交通渋滞が大問題となったところ、「せまい日本、そんなに急いでどこへ行く」というキャッチコピーが流行りました。私たちの人生も、80歳以上の長寿を授けられたとしても約3万日しかない人生です。1日10000円ずつ貯めても、使ってもたった3000万円です。高速情報化の現在、私が言いたいのは「短い人生、そんなに稼いで何にする」です。たしかに昔から「地獄の沙

汰もカネ次第」などとも言いましたが、それはさもし根性を嘲笑する言葉でした。やはり、あの世にお金を持っていきません。私たち人間はこの大地に生まれた以上は、土葬、火葬、また散骨などどんな葬法を選ぼうとも、結局は約2600年かけて15センチほどしか創られてこなかったような地球の表土の内の何兆分の1、いや何京分の1、いやそれ以上の天文学的な分母の1に帰るしかないのです。村や町の鎮守や氏神のかたちで祀られているのは、もともと産土うぶすなの神様として敬われていた神様です。土から生まれて土に還る私たちです。土の恩恵を自分の身体になぞらえて考え直すことで、大地つまり地球への感謝と報恩の人生を考えることができるでしょう。いま日本の各地で進められつつある経済効率と環境保全とを併せ考えようとする有機農法への取り組みは、民俗のα波（伝統波）の展開でありその現代版リニューアルでもあるのです。それは伝統の智慧を生かす営みなのです。

- (※1) 嘩峻 栗三「高度経済成長と農業・農村」『ワークシヨップ1「高度経済成長期の都市と農村」報告・討論記録集』国立歴史民俗博物館(2007)
- (※2) 久馬一剛「土とは何だろうか?」京都大学学術出版会(2005)
- (※3) 若月利之「土と海と人」と「化学と生物」23巻408-414頁(1985)
- (※4) 新谷尚紀「民俗学とは何か―柳田・折口・波沢に学び直す―」吉川弘文館(2011)
- (※5) 柳田國男「先祖の話(自序) 筑摩書房(1946)」
- (※6) 『日本常民生活史叢書』三一書房(1972-73所収)
- (※7) 新谷尚紀「高度経済成長と農業の変化」『国立歴史民俗博物館研究報告』第171集(2011刊行予定)
- (※8) 新谷尚紀「儀礼の近代―都市の暮らしの民俗学―」吉川弘文館(2006)

新谷尚紀(しんたに・たかのり)

國學院大學大学院および文学部教授・国立歴史民俗博物館名誉教授・総合研究大学院大学名誉教授・社会学博士。1948年広島県生まれ。早稲田大学史学科卒業。同大学院博士課程修了。柳田國男の著作に刺激を受けて、民俗学の道を志す。主な著書は、『神々の原像 祭祀の小宇宙』(吉川弘文館)、『柳田民俗学の継承と発展―その視点と方法―』(吉川弘文館)、『日本人の縁起かつぎと厄払い』(青春出版社)、『お葬式 死と慰霊の日本史』(吉川弘文館)、『伊勢神宮と出雲大社―「日本」と「天皇」の誕生―』(講談社)など。